はじめに

第５回「あの森を訪ねて」は、相模川の沖積平野に船の舳のように突き出た高麗山の森とした。市街地のそばにありながら県の天然記念物に指定されている貴重で興味深い森である。

コースは、大磯駅～高来神社～森林探勝路～湘南平～藤村旧居～鳴立庵～大磯駅

の約７ｋｍ。そのうち３ｋｍほどが山行となる。

旧東海道から高来神社へ

大磯の駅は、大磯丘陵の南端部を掘り割って造られている。県内の他の駅では味わえない落ち着いた一種独特の雰囲気がある。

高いビルもなく雑踏もない。申しわけ程度の駅前広場のすぐそばまで旧岩崎邸の樹林が迫っている。

まず、高麗山の麓にある高来神社を目指す。レトロな洋館を眺めながら坂を下ると電線の地中化により空が広くなったように感じられる国道に出て、旧東海道の面影を残す静かな通りに入る。見上げるような街道松が２０本ほどあり、趣のある傾きや形で道を覆っている。化粧坂の松並木という。

この付近が大磯の宿場の入り口であった所。曽我兄弟の仇討で知られる虎御前の化粧井戸等もあり、弥次・北の二人連れもゆかりの「虎が石」を見て歩いた道である。

道すがら左の家並みのすぐ裏にこれから行く高麗山の森が見える。

色とりどりの新芽が萌えだして盛り上がり、熾烈な競争を勝ち抜いたぞ、とその存在を誇っているかのようである。

高来神社

高麗山の麓にひっそりとある高来神社は、かつて高麗寺といった。

高麗とは朝鮮半島に一時栄えた「高句麗」のことである。

この地は、７世紀後半、戦いに敗れた高句麗人が上陸し住み着いた所といわれている。

神社は、一時、時の政権の手厚い保護を受け、寺領である後背の森の中には豪壮な伽藍が造営されていたというが、今は小さな神社を残すのみで、その栄華はしのぶべくもない。

境内にあるスダジイとニッケイの合体木や多数の平行脈の葉をつけるナギノ木も珍しい。ナギの葉は切裂きにくいので、男女の縁が切れないように願をかけるのに用いる習俗もあった。必要な人は一枚拾って財布にでも入れておくと御利益があるかもしれない。

高麗山の森

高麗山の森の一部２９ｈａは県の所有する森林で「高麗山県民の森」として管理され、探勝路や案内板などが良く整備されている。

そのなかで南斜面の９ｈａは、自然植生の３区分のうち、ヤブツバキクラス域の沿海性森林の特徴が顕著なスダジイ、タブノキを主林木とする常緑広葉樹林となっている。県内でも数少ないまとまりのある貴重な森林として、県の「天然記念物」に指定されている。

また、「かながわの美林５０選」や「日本に残したい自然１００選」ている。市街地に近く交通の便も良いので、一度は訪れてみたい所。

森を歩く

神社の裏から森へ入る。高麗山の山頂を目指す道ではなく、天然

記念物に指定されている南斜面を貫く探勝路を歩く。路は良く整備されている。緩やかな上り坂が続き、土砂崩落を防ぐ簡易な治山工事が行われている沢から九十九折の坂を上ると稜線の八俵山となる。

森は外から見ると一面の緑に覆われ、昼なお暗き林内かと思いきや、さにあらず、高い樹木の下は見通しも良く明るい。全般的に土壌は浅く、樹体を支えるために板根を発達させた木や、光を求めて枝を横に長く伸ばしたスダジイの木、そして、カゴノキであろうか樹皮が鹿の子模様にはがれた木もある。土壌の厚い所にはタブノキやイロハモミジなども見られる。

樹名板や森林の特徴等を解説した図板などがない。あれば五感に智の満足が加わって森への理解が深まるのに、と少々残念がる。

所々で杉の伐採が行われている。この杉はかつて松などと供に植栽されたもので、松は４０年ほど前までは樹林を突き抜けて独特の景観を醸しだしていたが松くい虫のために全滅し、あとを追うように杉も枯損が進んでいるようだ。

人為を排すれば、森は自然の姿に遷移していく。ここの森もそのような方向に進んでいるようだ。

光や水、土壌や地形そして温度などの無機的環境に対応した自然選択が働き、適応できるものだけが優勢となり子孫を残す。

３８億年前に生まれた一個の生命を共通祖先として、セントラルドグマのもとで、植物、菌類、動物などの多種多様な生命がある。

植物は４億７千年前に水中から陸上に進出した。現在、コケ類、シダ類、そして被子、裸子に区分される種子植物は２５万種程に分類されている。

植物は地球の環境を変え、自身もそれとの相互作用や菌根菌等の菌類や昆虫、動物などとの共生とせめぎあいにより、気が遠くなるような時間をかけて進化してきた。

なお、ここの森林の歴史などは自然環境保全センター県有林部の報告書に詳しいので参照されたい。

湘南平

尾根道をつたってテレビ塔のある湘南平にでる。千畳敷きとも呼ばれた所で、その地理的特性と眺望から戦時中は高射砲の陣地も造られたとのこと、今は自動車で行ける公園となっている。

展望台からは３６０度の景色が楽しめる、東には緩いカーブを描く海岸線に沿って平塚、茅ケ崎の市街が続き、江の島や三浦半島がかすむ。北には丹沢の山並みや彼方の富士山と飽きることがない。

ここからは急な九十九折の道を一気にくだる。小さな善兵衛池を横目に見て進むと豪壮な住宅が並ぶ一角にでる。そう、この地は大磯丘陵が冷たい風を防ぎ温暖な気候のため古くから政財界等の大物が別荘を構えた地域。今はマンションに姿を変えたところもあるが年を経た樹林に囲まれて風格のある趣で、息遣いが乱れるのは、山下りのせいだけではない。

街中散歩

線路を潜り細い路地を行くと島崎藤村が晩年を過ごした平屋の質素な住宅がある。藤村はこの地が気に入り貸別荘を借りて住んだ所。

藤村と妻の墓が駅近くの寺にある。帰り道なので寄ってみると良い。普通では見られないモダン（？）な墓である。

再び国道に出ると、右手奥に旧東海道の中でも屈指の松並木が見える。有名な御油の松並木より良い。ひっきりなしに車が通るため落着きと風情がないのが玉に傷。

町役場のそばの樹林のなかに、細い沢がある。ここが「新古今和歌集」２千首の中で「３夕」の一つとして有名な西行法師の歌が詠まれた鴫立沢。

季節が違うとはいえ鴫が飛び立つ情景や秋の夕ぐれの風情を感じさせるものはどこにもないが、小さな庵のそばの流れを見ているとそんな気にさせられるのは歌の力であろうか。

街中には老舗の店も多く味の町を地域の目玉にしているので、立ち寄ってみるのも面白い。

緩い坂を上ると大磯駅となる。

行くときと同じく静かで落ち着いた駅前である。

豊かな森と海に抱かれて歴史が息づく街は、なぜか懐かしく落ち着いた気分にしてくれるから不思議である。

（２０１３．４　瀧澤）